

音楽科におけるビッグブックの活用

—教科書との併用に着目して—

栗木 陽子

(本講座大学院博士課程後期在学)

The Using Big Books in Music Classes: In the Focus on the Method of Combination of Big Books and Textbooks

Yoko AWAKI

Abstract

The purpose of this study was to clarify the use of big books as supplement teaching aids in music classes for kindergarten children through the lower grades of primary schools, particularly the combination of big books and textbooks. The study focused on descriptions extracted from the American music textbook series *Silver Burdett Making Music* (2008) and its auxiliary big books employed as teaching materials. The findings were as follows. First, using big books together with textbooks is connected to developing skills for reading and listening to music. Second, big books are used in the beginning and middle sections of classes. Third, it was evident that textbooks are used for teaching advanced knowledge and skills.

はじめに

日本の音楽教育は、アメリカの音楽教師 L. W. Mason が明治政府の招聘によって来日した 1880 (明治 13) 年から大きく発展を始めた。Mason は、文部省音楽取調掛の御用係であった伊澤修二とともに、音楽教員の育成方法や教育プログラムの開発、日本初の音楽教科書である『小學唱歌集』の編集などに携わった。それ以後も日本では、音楽教育の発展のために、多様な音楽教育法や理論、教材をアメリカから移入した。戦前から戦後にかけて日本がアメリカの音楽教育から受けた影響に関しては、古田 (1975) や浜野 (1995) らが、さまざまな視点から論じている。

それらをふまえると、日本とアメリカの音楽教育に共通点が多いのは、ごく自然なことであるだろう。また、アメリカにおける音楽教育の変遷を辿るとともに、今後の動向を読み解くことは、日本の今後の音楽教育の在り方を検討するための非常に有効な手段なのではないだろうか。

現在の日本の音楽教育界では、学校教育における音楽の授業数の削減、それによる音楽の基礎的能力の低下の懸念、音楽の常勤教員の減少など、音楽教育そのものが疑問視される現状さえある。アメリカでも同様の状況はみられるが、新しいカリキュラム The National Core Arts Standards を発表するなど、危機的状況を打破するための次なる一手が打たれている。日本の音楽教育が先述の状況を回避するためには、近年カリキュラムの系統性、整合性という点で急速に発展しつつあるアメリカの音楽教育から示唆を得ることが、最も効果的な方法のひとつではないだろうか。

そこで筆者は、アメリカや日本の音楽教育に用いられてきた教科書に着目し、教科書編集者の視点から教育内容、教育方法に関する研究を行っている。この視点に着眼する利点は、現場の教師に対する、音楽

教育研究者の意図を読み取ることができるという点にある。研究者と教育実践者との方向性の統一は、教育現場の問題提起、改善のために重要であり、教科書は、両者をつなぐ代表的な存在のひとつである。教科書の中身は教育の方向性に伴って変化しているが、その変化を追うことで、音楽教育にまつわる研究がどのように発展し、どのような形で現場へ還元されようとしていたのか、読み取ることができる。

本研究ではその中でも、2002年に Pearson Scott Foresman 社から出版された音楽教科書シリーズ *Silver Burdett Making Music* (以下、*Making Music*) の補助教材、ビッグブックに着目する。2000年代のアメリカの音楽教育の中で、この教材がどのような役割をもっているのか、特に本論文では、教科書との併用に主眼を置いて研究を行った。

I ビッグブックの成立と目的

ここでは、ビッグブックの指導に関する先行研究をもとに、ビッグブックの成立およびその目的について整理しておく。

ビッグブックの始まりは、1960年代にニュージーランドやオーストラリアの学校で教師たちが手作りしたものであるといわれている。その後アメリカにて、1980年代後半に Whole language (全体的言語指導) という英語教授法が提唱された際、クラス内の児童全員に作品世界を分かち合わせるためにビッグブックが多用されるようになった。

Whole language のもととなっているのは、J. Piaget (1896~1980) や L. S. Vygotsky (1896~1934) らによる構成論である。彼らは、知識は他者ないし環境との相互作用を通して内部から構成されるのであり、教科書やワークブックを使用した人為的・行動主義的な学習によって身につけるべきではないということを主張した。そして、この主張に賛同した心理言語学者 Kenneth Goodman や絵本作家 Joy Cowley らは、読み書きに関する理論の構築や教育現場での実践的研究を重ね、教師による読み聞かせや子ども同士での朗読が可能なビッグブックを生み出した。

ビッグブックは、教室で複数の児童と一緒に見たり読んだりすることができるよう、1辺が 50~80cm ほどで製作されている。また、通常は 1冊につき 1教材のみが収録されている。使用方法は、教師による読み聞かせだけでなく、教師と子どもたちが一緒に朗読したり、読解した内容をもとに子ども同士が話し合ったりと、非常に多彩である。このことから、ビッグブックが、言葉の意味の理解や読解力、表現力など、実生活への応用を見越した包括的な読み書きの学習のための教材だということが読み取れる。

近年では、日本でも多様なビッグブックが出版されており¹、公共図書館や幼稚園、保育所などでの読み聞かせ教材として活用されている。それらの多くは、通常の絵本の拡大版にすぎず、掲載内容の再考、再編集などは行われていないことの方が多い。

II *Making Music* シリーズについて

1) 概要

Making Music シリーズの出版元は、アメリカの大手教科書出版社のひとつ Pearson Scott Foresman 社である。2002年に出版されたのちに、2005年と2008年に改訂されており、2008年改訂版は、Pre-K と Grades K-8用に各1冊ずつ、合計10冊シリーズで構成されている。生徒用教科書、教師用指導書のほかにも、CDやDVD、資料集など、さまざまな補助教材が揃っている。生徒用教科書は全頁がカラー印刷されており、ハードカバーの製本がなされている。

2) 単元構成

Making Music シリーズでは、Grade-6までと Grades 7-8で異なる単元構成がなされているが、ここでは、本論文に関連の深い Grades K-6に関して述べる。

Grades K-6の教科書には、まず大枠として、12の単元 Unit が設定されている。前半の6つの単元は「音楽づくりへのステップ Step to Making Music」という名称でまとめられ、音楽の基本的知識や技能を身につけるための連続的教育を目的としており、掲載順に学習すれば、徐々に音楽に関する基本知識について理

解を深められる仕組みとなっている。後半の6つの単元は「音楽づくりへの道 Path to Making Music」という名称でまとめられており、知識を補完し、生徒独自のパフォーマンスを引き出せるように、幅広いテーマに基づいて組織されている。また、いずれの単元も、「音楽用語の学習」「物語を表現しよう」「ポピュラー音楽および音楽の融合」など、さまざまな観点からテーマが設定されている。

各単元の下には、12前後の題材 Lesson が設けられている。それぞれの題材の中では、1曲以上の楽曲および1種類以上の音楽活動が提示されている。学年が上がるにつれて、1つの題材の中に複数の音楽活動が取り入れられる場合が増加する。²

3) 学習内容の分類

Making Music (2008) の教師用指導書には、各題材における学習の進め方、発問内容などが細かく記されている。他の教科の授業準備にも追われる教師や音楽が不得意な教師でも、授業が実施しやすいといえる。さらに、表1のような一覧表も掲載されているので、各題材の中で何をねらいとして設定するべきなのか、重点的に取り上げるべきキーワードが何か、ひと目で確認できる。

表1 題材の概要を示した一覧表の例

題材名	音楽的要素	音楽的技能
1. 天気表現	要素：発想 音楽的概念：強弱 重点：クレッシェンド、大きい、小さい、アクセント 二次的な要素 リズム：パターン 関連する『標準』の項目 1b・1e・2f・5c・6c・6e・9e	技能：聴取 目的：身体動作を通して強弱や応答の変化を聴取する 二次的な技能 ・歌唱 ・創作 ・器楽 ・聴取 ・動作 ・分析

一覧表内で最も着目すべき点は、音楽的要素 Elements と音楽的技能 Skills の2つの観点から提示された学習内容である。＜音楽的要素＞とは、音楽を構成する概念を指しており、この教科書内では図1に示した6種類に項目立てがなされている。他方、＜音楽的技能＞とは、音楽表現を実行したり感受したりするための技術を指しており、教科書内では音楽的要素よりも数多くの種類が示されている。＜音楽的要素＞と＜音楽的技能＞のうち、評価項目とすべきもの、つまり、各題材においてより重視すべきものは、黄色い吹き出しによって強調されている。ビッグブックにも、評価項目として指定された＜音楽的要素＞と＜音楽的技能＞のどちらかは、各ページの左上に明示されている。

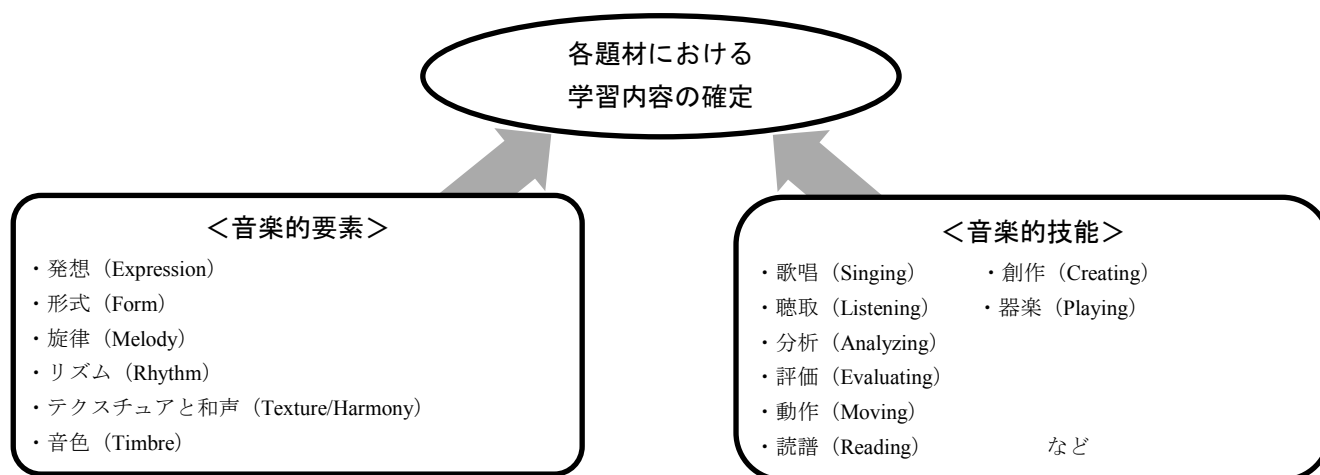


図1 *Making Music* (2008) シリーズにおける学習内容の示し方

Ⅲ Making Music シリーズにおけるビッグブック

Making Music シリーズの Grades K-2 には、各学年に 1 冊ずつ、計 3 冊のビッグブックが付属している。ビッグブックは、教科書に掲載されている内容の抜粋によって構成されている。以下、Grade-K の教科書およびビッグブックを例に挙げて述べる。

Grade-K の生徒用教科書には 12 の単元があり、さらにその下に 12 ずつの題材が設けられている。したがって、合計 144 の題材が設けられているが、そのうちビッグブックに併載されている題材は、各単元から等しく 5 つずつ、計 60 存在する。ビッグブックにのみ掲載されている題材は存在せず、あくまでも、教科書に掲載されている各題材の抜粋によって、ビッグブックは構成されている。

なお、Making Music シリーズが学校現場で使用されていたのと同時期の 2005 年に、McGraw-Hill 社からも音楽教科書 *Spotlight on Music* シリーズが発刊されているが、このシリーズにおいても、補助教材の 1 つとしてビッグブックが付属している。さらに、算数や理科といった音楽以外の教科においても、ビッグブックが教科書シリーズの一部に組み込まれている例がみられた³。Making Music シリーズが発刊された当時の教科書出版社業界としては、ビッグブックが有効な教育手段であると認識されていたことが予想できる。

Ⅳ 着眼点の設定

ここまで述べてきたように、教科書内のすべての題材のうち、ビッグブックにも併載されているものは限定的である。数多くの題材の中から、どのような基準で、ビッグブックに併載される題材が選定されたのだろうか。そして、それらの題材は、ビッグブックを用いて学習することによって、いかなる学習過程や成果が期待されていたのだろうか。

また、ビッグブックに併載された題材たちは、必ずしも教科書の掲載内容をそのまま丸写しされた訳ではないという点にも、着目すべきだろう。ビッグブックに掲載された内容と、掲載されなかった内容を整理することで、ビッグブックの使用目的がより明確になるのではないだろうか。

そこで本論文では、Grade-K に焦点を当て、ビッグブックと教科書との比較を通して掲載内容の差異を分析することとした。具体的には、以下の 2 つの観点で分析を実施する。

- 1) 併載された題材における学習内容
- 2) 併載された題材における教科書とビッグブックの差異

Ⅴ 分析と考察

1) 併載された題材における学習内容

まず、ビッグブックに掲載された 60 の題材のみを抽出し、＜音楽的要素＞と＜音楽的技能＞の 2 観点から、学習内容の分類および集計を行った。そして、ビッグブックの学習内容別題材数、および全題材数に対する割合を算出した。＜音楽的要素＞については図 2 に、＜音楽的技能＞については図 3 に、それぞれ結果を示す。

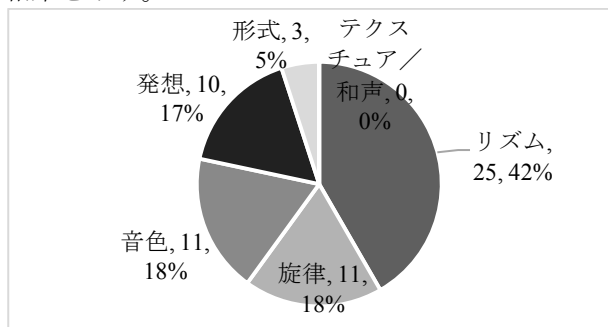


図 2 ビッグブックにおける学習内容＜音楽的要素＞

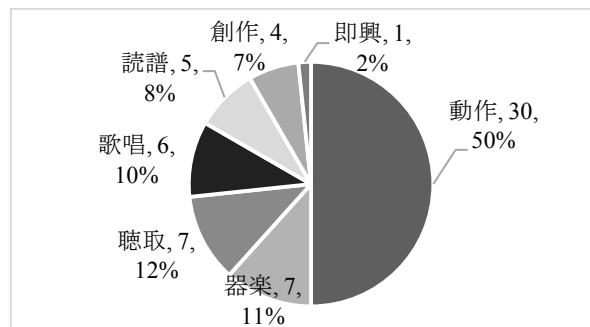


図 3 ビッグブックにおける学習内容＜音楽的技能＞

図2および図3から、ビッグブックにおいて比重が置かれている学習内容は、＜音楽的要素＞では「リズム」、＜音楽的技能＞においては「動作」であることがわかる。教師用指導書を参照すると、Grade-Kに限らず、*Making Music* シリーズの低学年においては、身体表現の伴った学習活動が非常に多い。ビッグブックに限定してみても、それが顕著に表れているといえよう。

次に、ビッグブックの学習内容にみられる傾向を教科書全体と比較する。教科書に掲載されている144の題材について、＜音楽的要素＞と＜音楽的技能＞の2観点で学習内容を分類し、図2および図3と同様に、題材数および全題材数に対する割合を算出した。図4および図5に、その結果を示す。

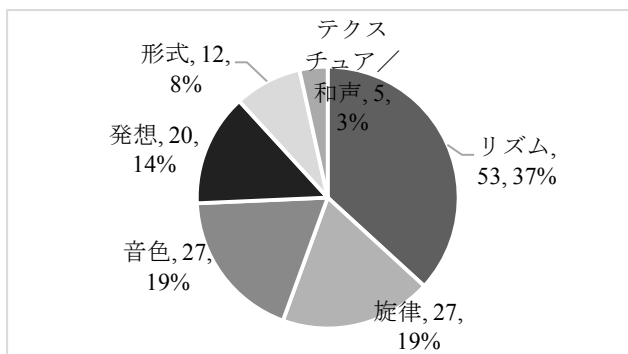


図4 教科書における学習内容＜音楽的要素＞

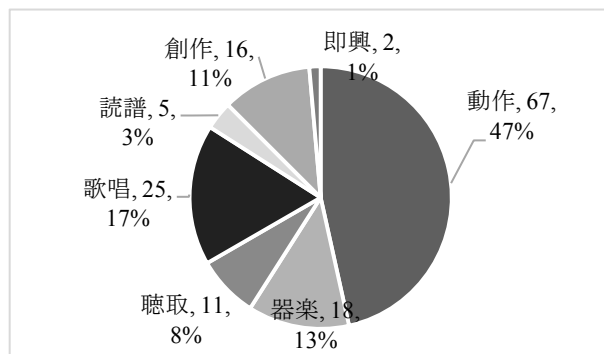


図5 教科書における学習内容＜音楽的技能＞

図2と図4の結果をもとに、＜音楽的要素＞の観点から学習内容の偏りを比較した結果を図6に示す。

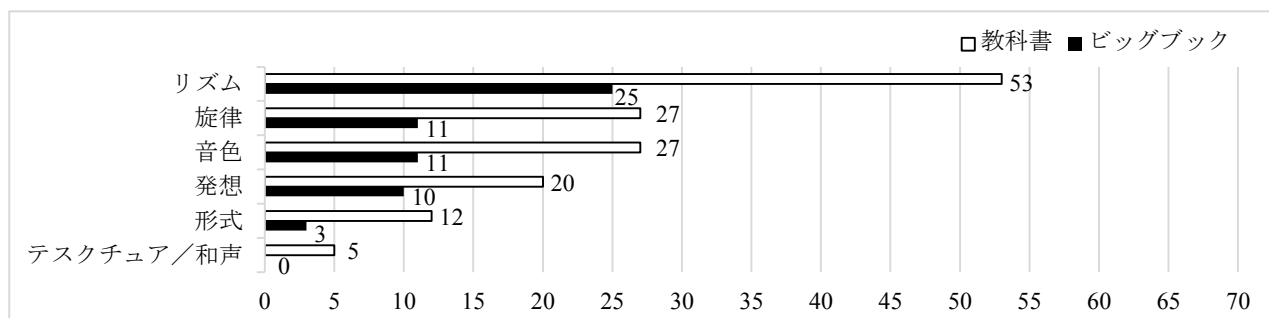


図6 学習内容別題材数の比較＜音楽的要素＞

図6から、＜音楽的要素＞の場合、取り上げる学習内容の偏り方は、教科書とビッグブックの間ではほぼ変わらないということがわかる。すなわち、「リズム」が学習の主軸となり、次いで「旋律」「音色」に関する学習を行うことで、音楽の基本的知識や感覚を養う流れが垣間見られる。

次に、図3および図5をもとに、＜音楽的技能＞の観点から、学習内容別題材数を比較した結果を図7に示す。

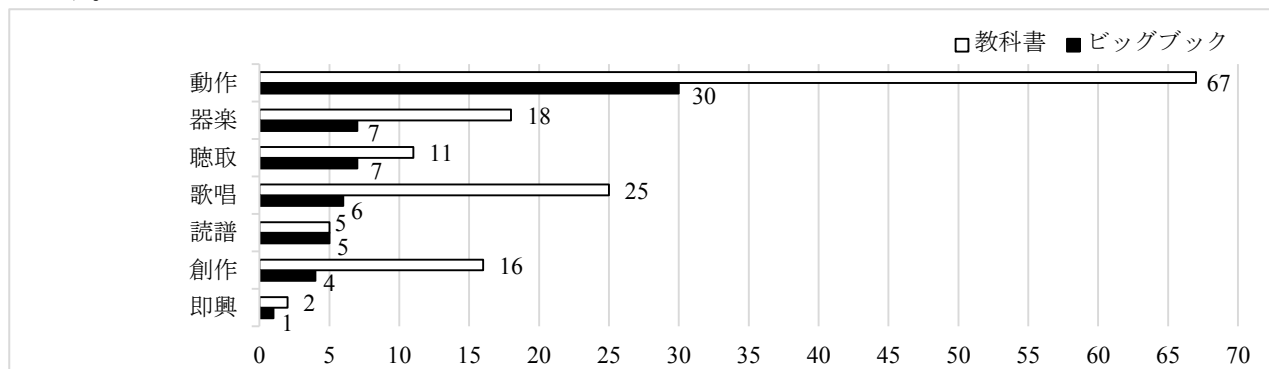


図7 学習内容別題材数の比較＜音楽的技能＞

<音楽的技能>においては、取り上げる学習内容の偏り方に、教科書とビッグブックの間でずれが生じている。言い換えるとそれは、特定の音楽的技能の習得が、ビッグブックの使用と非常に強く関連づけられているということでもあろう。

例えば、図7に示された7つの音楽的技能のうち、教科書内では比較的取り上げられる機会の多かった「歌唱」や「創作」の技能が、ビッグブックにおいてはあまり頻出しない。また、ビッグブックにおいて「器楽」と「聴取」を扱う題材は同数だが、教科書にもともと掲載されていた題材数を考慮すると、「聴取」の方が、よりビッグブックとの結びつきが強いといえる。さらに、「読譜」においては、教科書に掲載されたすべての題材がビッグブックと関連づけられている。このことから、楽譜を読み取る能力の育成が、いかにビッグブックと強く結びつけられているかがわかる。本来のビッグブックの目的である「包括的な読み書きの学習」が、「音楽の読み取りや聴き取り」という形で継続されているといえよう。

これらのことをさらにわかりやすく示すために、教科書上の題材がビッグブックに併載される割合（併載率）を学習内容ごとに算出し、その結果を図8および図9に示した。教科書には144の題材が掲載されているのに対して、ビッグブックには60の題材が掲載されている。したがって、題材全体の併載率は41.6%ということになる。全体の併載率よりも値が上回れば、ビッグブックを用いての学習が重視されており、下回れば、ビッグブックを用いる必要性がそれほど高くない学習内容である可能性が示唆される。また、全体の併載率に近ければ近いほど、教科書と同程度の掲載状況だと見なすことができるため、学習内容の習得とビッグブックの関連性は弱いと判断できる。

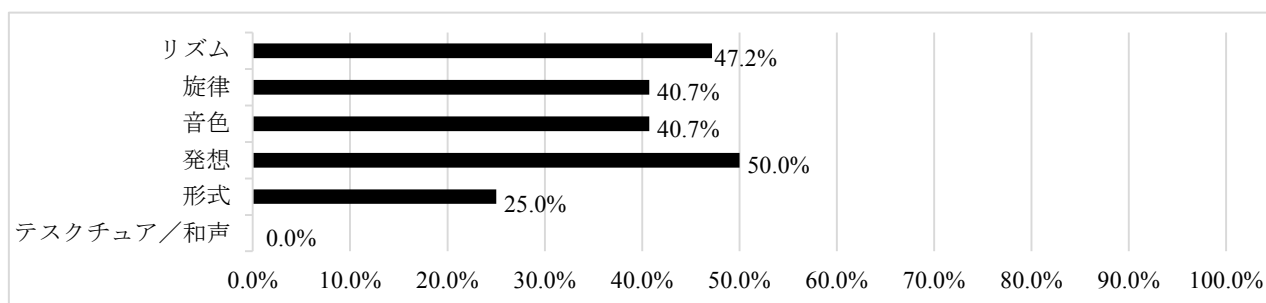


図8 ビッグブックへの学習内容別併載率<音楽的要素>

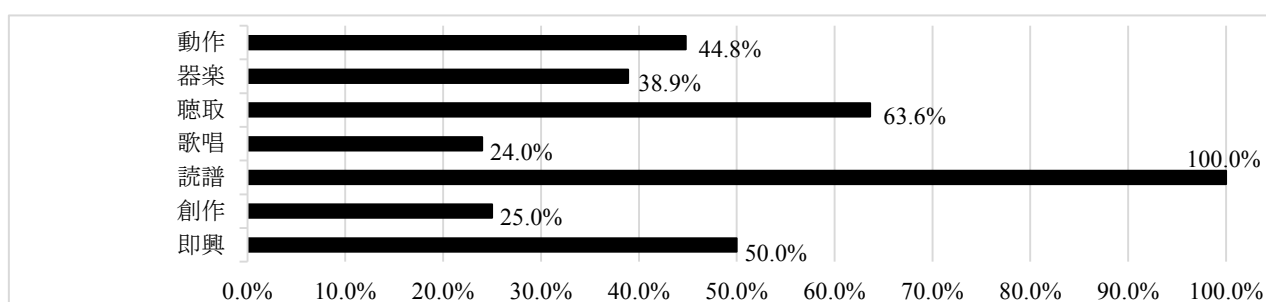


図9 ビッグブックへの学習内容別併載率<音楽的技能>

図8では、「形式」「テクスチュアと和声」の2要素が、全体の併載率から大きく値を変化させているのが見て取れる。ただし、それ以外の4要素に限れば、全体の併載率との差が10%以下であり、<音楽的要素>の学習の、ビッグブックに対する依存性の弱さが裏付けられた。そもそも、「形式」や「テクスチュアと和声」に関する題材は、Grade-5以降で多く設定されている。したがって、これらの音楽的要素とビッグブックとの関係性は、非常に弱いといえよう。

図8と比較すると、図9の併載率のばらつきは顕著である。もともとGrade-Kの教科書でほとんど取り上げられていなかった「即興」を除いて考えた場合、全体の併載率との差が10%以内の技能は、「動作」と「器楽」の2種類だけである。残りの4種類のうち、「歌唱」と「創作」はビッグブックとの関連性が極端に弱く、「聴取」と「読譜」はビッグブックを利用した学習が非常に重視されているという可能性が、より強く示された。

2) 併載された題材における教科書とビッグブックの差異

Making Music シリーズの教科書では、ほぼすべての題材が、見開き1ページ上に掲載されている⁴。同一の題材に関して、教科書とビッグブックを比較したところ、教科書見開きページの左半分がビッグブックにそのまま転載されていることが判明した。教科書の左ページに掲載されているページは、幼児や児童の興味を引き出すためか、非常に派手な色使いで、掲載されている写真や図も大きく、ページ全面を使用している。それに対して、右ページは一部の題材を除き、必要最低限の内容だけが掲載されている。挿絵の挿入もないため、余白が目立つ。

表2は、ビッグブックに掲載された60の題材について、右ページに掲載されている内容、つまり、ビッグブックに掲載されなかった内容を分類し、題材ごとにまとめたものである。

表2に示したとおり、教科書のみに掲載された内容は大きく4種類のパターンに分類できた。以下に、4種類の掲載内容別に、教師用指導書に例示された指導案を用いながら、教科書とビッグブックの差異や併用方法の具体について述べる。

・楽譜

全60の題材のうち、8割弱が、ビッグブックと併用する教材として楽譜が選択されていた。このうち、1曲だけはリズム譜であったが、ほかはすべて歌唱曲を単旋律で示したものである。

Unit10/Lesson10において、ビッグブックに示されているのは、歌唱曲に登場するロバの様子の変化を描写した絵と、歌唱曲に合わせて表現する簡単な3小節分のリズムである。先にビッグブックと音源を併用することによって、ロバの変化を十分に理解することができる。また、ビッグブックに示されたリズムは、歌唱曲の最後の3小節と対応しているため、歌唱曲と抜粋されたリズムとの関連性を、楽曲を歌いながら楽譜上で確認することができる。しかしながら、この題材で用いられる楽曲は3番まであり、教科書の使用目的が、リズムに対する理解の深化ではなく、単なる歌詞の確認になってしまう場合も考えられる。

・詩

次に多いのは、楽曲のイメージを膨らませるための詩が掲載されているというパターンである。掲載されている詩は、歌唱曲の歌詞とは別のものであり、学習の中盤から終盤で取り上げられることが多いようである。

例えば、Unit5/Lesson10のビッグブックのページには、街の様子を描写した絵が示されており、子どもたちは絵を見ながら、聞こえてきそうな音を推理することができる。一方、教科書の右ページには、街の様子を描写した詩が掲載されている。指導書に示された指導案には、教師が効果音を鳴らし、絵の中のどの箇所に対応する音か学習者に考えさせる活動や、詩の中に出てくる言葉に対応する音を学習者たちが打楽器で表現する活動が例示されていた。

・歌詞

音程や強弱などは一切示さず、題材で取り上げられた歌唱曲の歌詞だけが示されている。指導案上では、ビッグブックを用いた学習活動のあと、歌詞を確認するために教科書を開く授業展開が多く見受けられた。

Grade-Kにおいて、教科書の右ページに掲載されていた歌詞を確認したところ、いずれも比較的歌詞の分量の多い曲であった。したがって、音程やリズムを敢えて省略した意図がある訳ではなく、歌詞が長すぎるが故に楽譜を省略せざるを得なかった可能性も考えられる。

・リスニングマップ

リスニングマップとは、絵や図形を用いて音の高低やリズムなどを示したものである。教科書の右ページがカラーで印刷されている数少ない題材である。Unit7/Lesson10では、最初にビッグブック上の絵によってピアノの音色や楽曲のイメージを膨らませたあと、リスニングマップを活用し、2拍子の感受・知覚といった活動へ発展させられるように構成されている。

表2 ビッグブックから省略された教科書の内容

掲載内容	題材数
楽譜	47
詩	7
歌詞	4
リスニングマップ	2

先に示した4種類のパターンを分析したところ、ビッグブックが使用されるタイミングは、学習の導入部分である場合が多いということがわかった。絵や写真を利用して歌詞の楽曲や情景を想像したり、楽曲に合わせて行う身体表現の方法を確認したりといったものが多い。また、単に題材の内容に興味をもたせるためにビッグブックを使用することもできよう。そういった活動の中で、教師と活発にやり取りを繰り返すことができる。つまりそれは、元来のビッグブックの使用方法に非常に近い状態だといえる。

また、ビッグブックを起点に、学習の主となる音楽活動に進む場合も少なくない。歌唱や楽器演奏など、音楽を直接表現することは少ないものの、ビッグブックを見ながら音楽を聴取したり、身体を動かしたりすることで、演奏表現に必要な能力を養っていけるような題材構成であることが、教科書や指導書の記載内容から確認できた。

そして、そのような表現活動を通して学習したことを定着・応用させる段階において、教科書を活用する傾向が、Grade-Kでは非常に強いということも示唆された。教科書とビッグブックを同時に開くよりも、授業の前半はビッグブック、後半は教科書というように、授業展開に合わせて教材を切り替えることが求められていた。それは、教科書とビッグブックそれぞれの特性を生かした結果ともいえよう。

また、楽譜の読み方やハンドサインをまだ十分会得していないGrade-Kの学習者にとって、教科書のみを使用した説明では、学習内容が理解しづらいと予想できる。ただし、Grade-1とのつながりや、発展的学習を意図した授業展開を望む場合には、教科書を使用する時間が増加することとなるだろう。

おわりに

本論文では、音楽教育におけるビッグブックの活用の意義、とりわけ、教科書とビッグブックを併用することの有用性について示唆を得ることを目的とした。そこで、アメリカの大手教科書出版社が発刊した音楽教科書 *Making Music* シリーズの補助教材に着目し、Grade-Kにおける、教科書とビッグブックの差異について分析を行った。併載されている題材の学習内容や、ビッグブックに掲載されなかった内容に着目して分析を行った結果、以下のように結論をまとめることができる。

- ビッグブックと教科書を併用しての学習は、Grade-Kの場合、読譜力や聴取力といった音楽的技能の習得を目的としている場面が比較的多い。
- ビッグブックは授業の序盤から中盤で使用される場合が多い。ビッグブックを見ながら、題材に対する興味をもたせたり、楽曲に対するイメージを深めたりする効果が期待されている。また、ビッグブックを見ながらの音楽表現は頻出しないものの、ビッグブックの使用を通して、演奏表現に必要な能力を養っていけるよう、題材が構成されている。
- 学習した知識の応用や発展的な内容の理解を促す際に、教科書を併用する傾向が強い。

今後は、Grades 1-2のビッグブックも同様に分析し、今回の結論の続きを明らかにしたい。また、実際にビッグブックが使用された際の様子を調査し、ビッグブックの有用性をより具体的に解明していきたい。

注

- 1 偕成社、チャイルド本社、福音館書店など多数の出版社から出版されている。「ビッグブック」「大型絵本」「大きな絵本」など、出版社によって名称は異なっている。
- 2 *Making Music* シリーズの単元構成について、今回はUnitおよびModuleのことを「単元」、Lessonのことを「題材」と訳している。
- 3 2000年代には、Macmillan/McGraw-Hill社のElementary Reading TreasuresシリーズやHoughton Mifflin社のMathシリーズなど、アメリカ国内の大手教科書出版社が、補助教材としてビッグブックを編集・発行している。
- 4 Unit12/Lesson8だけは、1つの題材に3ページが費やされている。1ページ目はビッグブックに併載されたページで、残りの2ページには、楽譜がそれぞれ1曲ずつ掲載されている。

引用・参考文献

- Beethoven, Jane. et al. (2005). *Silver Burdett Making Music 2008 Edition, Grade-K Teacher's Edition*. Illinois: Pearson Scott Foresman.
- Beethoven, Jane. et al. (2005). *Silver Burdett Making Music 2008 Edition, Grade-K Big Book*. Illinois: Pearson Scott Foresman.
- 古田庄平 (1975) 「わが国における音楽科教育の歴史的変遷」『長崎大学教育学部人文科学研究報告』第 24 巻, pp.53-60。
- 浜野政雄 (1995) 「学校における音楽教育の変遷—学習指導要領の改訂を軸として」『音楽芸術』第 53 巻, 第 9 号, 音楽之友社, pp.18-22。
- 加藤泰彦, 長廣真理子, 尾崎恭子 (2008) 「幼児・1 年生におけるビッグブックの実践的研究 : 米国におけるビッグブックの理論と実践の調査報告第 1 集」『中国学園紀要』中学学園大学, 第 7 号, pp.131-135。
- 加藤泰彦, 尾崎恭子, 加藤承彦 (2006) 『ビッグブックとは何か?』チャイルド本社, pp.8-19。